

答辞

厳しい寒さもいつしか終わりを告げ、春の日差しを感じる季節となりました。本日はわたくしたちの為に、このような素晴らしい卒業式を催していただき、ありがとうございます。普通科・英語科・国際教養科の3つの学科で迎える最後の卒業式でもあり、卒業生一同特別な思い出を抱きつつ今日の日を迎えました。

また、校長先生をはじめ、ご来賓の皆様より暖かい激励のお言葉をいただき、心より感謝申し上げます。

ここ成田国際高校で過ごした高校生活は、たとえつらいと覚えることがあっても、それは守られている立場の中での苦悩であり、卒業を迎えた今からは、人に頼ることなく自分の力で道を切り開いていかなければならないことを今切実に感じています。

私が成田国際高校に入学をしたいと決心したのは中学校1年生の頃であり、吹奏楽部に入部することが夢でした。入学して1年間は部活動に打ち込む毎日でしたが、2年生の中頃から、部活動の中で気付きのできる守備範囲の広い人間になりたいと思うようになり、周囲に目を向けるように心掛けるようになりました。その結果、不思議なことに授業の全てにも関心を強く持つようになりました。そして、授業の中から、教科を越えたメッセージ、言い換えるなら生き方へのメッセージを感じ始めたのです。世界史でのヨーロッパにおける人権確立の歴史・政治経済では日本国内での人権問題、民族問題や諸外国から見た日本への評価、現代文でのブルジョアについての学び、中国語の授業における日中の歴史やアジアの中での日本のあり方、生物の授業での遺伝と障害の関わりなど、学力を測るための知識ではなく、全てが自分の生き方の栄養となるものでした。「ここで学ぶことが出来てよかった。」「これを知らずに、大人にならなくて良かった。」そう思えるようになってからは、学ぶことは大きな得であり日常全てが楽しいと覚えるようになったのです。

一方、部活動においても、大きな学びがありました。

1年生の頃は人との比較をしたり評価を気にすることに大きなエネルギーを使っていました。しかし、自分の弱い所を認め、受け入れることから始まり、言い訳や自己弁護をせずに、足りない部分は人以上の努力で、粘り強く力をつけるしかないことに気付きました。そこからは指摘されることが嫌ではなくなり、逆に注意されることは良くなる証拠と思えるようになりました。自分の評

価にとらわれなくなってから、他の人の成長が自分のことのように嬉しく感じられました。同じ目標や問題を、同じ時間の中で共有する仲間と過ごした日々や地域の方々と音楽の喜びを共有できた感動は、生涯かけがいのないものとなりました。

私は将来、特別支援学校の教員として、この成田国際高校で培ったものを基礎都市、努力を惜しまず、自己を優先させることをせずに、広い視野の中で積極的な人生を送りたいと思います。

在校生の皆さん、この成田国際高校はチャンスに溢れた素晴らしい学校です。自分がやる気になれば、それを助けてくれる環境は整っています。自ら求めれば求めるほど、日常から自分の生きていく為の力を蓄えることができるでしょう。困難に直面し、思い悩んで周りが見えなくなったときは、友達のことや、学校生活で何気なく過ごしている一つ一つのことに目を向けてみてください。小さなことに感謝をしたり、人に手を差し伸べられるような心のゆとりがすこしずつ芽を出して、きっと毎日が楽しくなるはずです。

今日まで支えて下さった先生方、日々の授業や特別活動の中で、わたしたちに何か生きていくための道しるべを伝えて下さろうとする先生方のお姿に幸せを感じない日はありませんでした。わたしたちの高校生活を時には厳しく、時には暖かく見守ってくださり、本当にありがとうございました。

そして私達が3年間、勉強に部活動に励み、高校生活を謳歌することが出来たのは、家族の支えがあったからであると感謝しています。

本日ご臨席の皆様をはじめ、関わって下さった全ての方々の優しさやお心遣いが、わたしたちを支え、心の糧となりました。本日卒業生275名は本日この成田国際高校を卒業し、それぞれの道を歩んでいきます。この感謝の気持ちを、いつの日か一段と立派に成長した姿をもってお示しすることができるよう、努力していくことを誓い、答辞とさせていただきます。

平成20年3月7日
第31回卒業生代表 黒田 際